

BankART 妻有 2012年の夏

桐山の家 Kiriyama House

松代の駅から曲がりくねった道をいき、芝峠温泉を越え、車で約12分。休耕している棚田が見下ろせる場所に建つ、築40年の普通の農家。大きな落葉樹が2本、50年ぐらい経っている杉が10本程、すぐ近くに巨大な双子のご神木と祠。

建物は半分壊れている。普通の家を普通の家のように改修していきたい。

外にキッチンがあってもいい。お風呂を気持ちよい空間にし、外の風呂もあってもよい。

ありとあらゆる部分をそのままにしておきたい。

表札や取手やまな板や茶碗、こたつ布団。枕、すだれ、カーテン、家具、コンロ.....。

ありとあらゆる部分をアーティストに委ねたい。

誰が訪ねてきてくれても、野菜やアイスクリームやお風呂でもてなしたい。

誰が訪ねてきてても普通に過ごせる家にしたい。(みかんぐみに手渡した手紙より)

The Kiriyama House used to be a regular farmer's house of 40 years old. It takes 12 minutes by car from Matsudai station after driving across the mountain pass around Shiba touge Spa. The house overlooks the terraced rice fields that is lying fallow now. In the neighborhood there are two big deciduous trees, with about 10 trees of 50 years old. Next to the house, there remains a small shrine along with a pair of giant trees dedicated to the gods. The house was abandoned and quite damaged.

We think we will renovate the house just as a normal traditional one. The kitchen and bath room can be in the outside as in the old days, but they should be clean and comfortable. While renovating the building, we wish to preserve the things in the house as they are : the nameplate, door knob, cutting board, teacups, futon, pillows, curtains, furniture, cooking stove etc. At the same time we wish to leave all of them at the artists' disposal, so that this can be a place for artworks. Of course, everyone is welcome. We are willing to offer fresh vegetable, sweets and soothing bath. Everyone should have a nice time here, then we hope that the house may become for everybody. (Excerpt from a letter sent to Mikan)

BankART 妻有 2012年の夏 桐山の家 Kiryama House

2012年7月29日(日) ~ 9月17日(月) 10:00-17:30
大地の芸術祭作品番号D134 (松代エリア)
新潟県十日町市桐山86



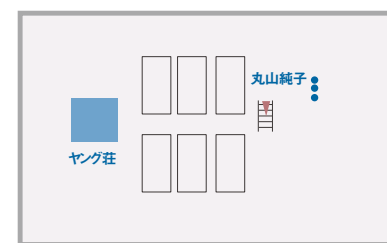
2004年に実験事業としてスタートしたBankART1929は、2006年度から本格的な事業へと移行したが、そのときの長期方針のひとつに「他都市との連携及び国際的なネットワークの構築」といったテーマを掲げた。横浜を拠点に様々な活動を展開していくことは変わらないが、だからこそ外部の人たちとのコミュニケーションの機会を増やすことが重要だと考えたからだ。こうした背景のもと、北川フラムさんとの縁もあり、大地の芸術祭の空家プロジェクトに参加することになる。松代の山中の農家を購入、「BankART妻有」が生まれる。さて何をするか……。ぼんやりとだが、アーティストにお願いして、作品を家に展示することだけは止めようと思っていた。家そのものを「家=住む家」として見せたいと考えた。これまでいくつかの建築的なプロジェクトで協働してきた「みかんぐみ」に大まかな改修案をお願いする。みかんぐみとの話し合いの中からでてきた基本的な方針を記した一葉の手紙を手渡す。(表面参照)

これを受けて、みかんぐみと神奈川大学曽我部研究室は、この家の様々な可能性を引き出す改修計画を立ててくれた。大きな吹き抜け、たくさんのお風呂、黒い内装壁。また、家としての設備や構造の性能を向上させたかった

ので、合併浄化槽(水洗便所)、光通信、補強のための構造ベニヤの挿入等を行なった。

こうした建築的なインフラに加えて様々なアーティストが、「家の部位」を連鎖してくれた。呼び鈴は、竹の松本秋則さん、吹き抜けの手摺は鉄の吉川陽一郎さん。村田真さんは窓から見える景色を直接壁に描いてくれ、薄暗い屋根裏には丸山さんがビニールの白い花。田中信太郎さんは、まつだいの赤とんぼのひ孫(?)を前庭に。開発好明さんは「田中一」という蛍光灯(照明)の作品。和田みつひとさんは、既存の破れた障子を色和紙で見事に生まれ変わらせてくれた。磯崎道佳さんはゾウキンゾウの友達のゾウキン鯉の布団をつくってくれた。PHスタジオは複雑な白い部屋を構築。原口典之さんが、その部屋にウレタン樹脂の床を挿入。今年は新たに浅井裕介さんの作品が加わり、幸田千依さんがレジデンスしながら、作品制作を行なってくれている。夏後半には続・朝鮮通信使の打楽器隊がレジデンスする予定だ。

2012年夏、BankART妻有は、「家」として様々な人を招きながら、夏とアートを楽しむことができる場所になってくれればと思う。

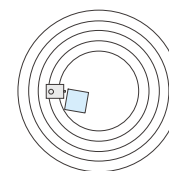


カーテン:スタジオニブロール
LED照明:共同アトリエ+コモレビデザイン

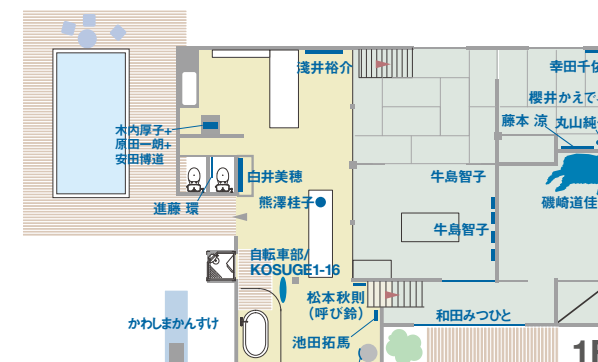
3F



2F



小屋



1F

↓ 田中信太郎(トンボ)

